

内モンゴル・ホルチン地方のブォ（シャマン）の祭壇

サラングワ

キーワード 祭壇、オンゴット・イン・サルガ（亡きシャマンの祭壇）、ロス・イン・サルガ（蛇の精霊の祭壇）、シェン（仙）・ネ・サルガ（狐の精霊の祭壇）、ボルハン・ネ・サルガ（チベット仏教の仏の祭壇）

はじめに

内モンゴル・ホルチン地方¹の民間では、現在、仏教の仏やかつて代々祭ってきた家畜と富の神であるジャチやボームルの祭祀を再開し、祭壇を設えて、日常祭祀や定期的な祭祀を行うことが増えている。ブォ²の祭壇は、一般人より複雑さを示す。本稿で、ブォの祭壇を取り上げることにする。

祭壇を「サルガ」、あるいは、「タヒルガン・シレー」（祭卓）と言うが、さらに細かく分類される。祭壇は基本的に4種類ある。①守護霊である亡きブォの霊の祭壇を「オンゴット・イン・サルガ」、②チベット仏教の仏を祭る仏壇を「ボルハン・ネ・サルガ」、③ロスと言われる蛇の精霊の祭壇を「ロス・イン・サルガ」、④狐の精霊の祭壇を「シェン（仙）・ネ・サルガ」、あるいは「道封（中国語）^{ドォフン}・ネ・サルガ」と称する。ブォにとって、祭壇は、聖なる信仰の場、守護霊とのつながりの場、癒しの場でもある。

1. 祭壇の設置

現在、ホルチン地方で、一般家庭で、仏教の仏を祭祀することが復活しつつある。その原因は、基本的に2つある。1つは、自ら祭りたいという思い、もう1つは、何らかの不幸である。その際に、ラマやブォの託宣に従って、1950、1960年代以前に祭っていた仏を求めてきて祭る人がいれば、ラマやブォの勧めてくれた仏を祭ることもある。もし、家族に、かつて、家に祭っていた仏の名前を覚えていてる人がいれば、その教えに従って同じ名前前の仏像や仏画を求めてきて祭る。また、仏像や仏画が没収される、公に祭ることが禁じられた時代に工夫して秘匿し得た場合³、その仏像や仏画を取り出して祭祀を復活させる。あるいは、自らの思いで仏像や仏画を求めてきて仏壇を設置して祭る現象がみられる。祭る方法としては、欠かせないのは線香である。これ以外、酒、水、果物、菓子、乳製

¹ホルチン地方とは、現在、狭義的に、地区レベルの通遼市とヒンガン（興安）盟（地区レベルの市とおなじ行政単位）を含む。

²ブォ（buu）という語は、内モンゴル・ホルチン地方では、男性シャマンを指し、また、シャマンの総称でもある。本論では、ホルチン地方のシャマンをブォと記す。

³仏像や仏画を家の壁、屋根、倉庫、鳥の巣に隠したり、地面に埋めたりした。

品、砂糖などがあげられる。祭壇に毎日線香を1本か3本焚く、あるいは、毎月旧暦の1日と15日か2日と16日に線香を焚く。食べ物の供物は、一定の時間を供えると、下げて、仏の恵みとしていただく。

ホルチン地方で、亡きブオの守護霊、狐の精霊、ロスに捧げる供物で欠かせないのは、線香の煙である。周知のとおり、線香は清めの役割を果たす。ブオ達の中に線香を歌う次の神歌が伝承されている。

フジ（線香）の煙は細いけれども
フへ・オットルゴイ（蒼天）を抜ける。
サン（杜松の粉）の香りはほのかだけれども
サンサル（宇宙）に届く。

「フ」と「サン」で頭韻を踏んだ短い詩であるが、線香の煙を介して、信仰心を宙の神々、守護霊、精霊に伝達するという内容である。



図1 寝室の西側の壁のところに設置されている、ホルチン左翼後旗⁴在住の農民ドゥレン（1939年生）と金銀小（1942年生）夫婦の仏教の仏の祭壇

ドゥレンによれば、厨子に入れて祭っているのは手描きの緑度母で、ドゥレンの母親（1921-1966）が8歳のときにその母親に連れられて、寺院に行つて、五体投地にして拜んで、招いた仏像である。

⁴旗とは、モンゴル語で、ホシヨと言ひ、内モンゴルの行政単位で、中国の県に当たる。

それを守り神として、袋に入れて、首から掛けていたが、文化大革命（1966—1976）のとき、紙に包んで村の西側にある樹林に捨てた。不思議なことに、ドゥレンの次女（1966年生）が下校途中、路上で発見。「捨ててほしくないか」と思って、迷うことなく拾った。自宅に持ち帰って、倉庫に入れて隠した。1985年に次女が急に痙攣をおこした。現代病院の治療を受けても治らなかったのに、シャマンの治療を求めると、亡き祖母が緑度母を祭祀することを望んでいると託宣。シャマンの話に従ってしたところ、次女が快癒。その次女が父方と母方の先祖にいたシャマンとラマの霊に選ばれて、現在シャマンとなったという。

厨子の隣に額に入れて祭っているのは、薬師仏である。2011年12月に、ドゥレンの長女（1960年生、高校教師）とまだ巫病中だった次女、瀋陽市に出稼ぎしている長男（1970年生）が遠近で有名な男性シャマン（1966年生）の家に行った。その目的は、次女の巫病の再確認と長男の仕事運についての占いを仰ぐためであった。その際、シャマンに、「代々医者が出る家柄で、孫（2004年生）が将来医者になる可能性があるのだから、薬師仏を祭るとよい」と託宣された。その後、次女が通遼市にあるシラムレン寺院に行き、薬師仏を招き、ラマにお経を唱えて命をもらせてもらって、両親が祭っている仏教の祭壇に安置した。祭壇の左側に安置されているのは、阿弥陀仏で、2012年夏、長男の1970年代生まれの妻がシラムレン寺院からもらってきて安置したものである⁵。仏教の仏壇に供えているのは、造花、線香、菓子、果、市販の祭祀専用の桃の形をした蒸しパンである。

このように、民間では、仏教の仏を祭る仏壇が復活している一方、その祭壇に祭る仏が増えて行くことがうかがわせる。

祭壇を設置する場所としては、居室や寝室ではない部屋の西側の壁に祭るのが、最も理想的と考えられている。近年、部屋を板などで仕切って、仏間（ボルハン・ネ・ゲル）にする現象も見られる。住宅事情によって、居室兼寝室の西側の壁の中心部、部屋の片隅に設置された祭壇も良く見かける。子孫が、先祖の祭っていた仏教の仏の祭祀を復活させたいが、先祖の代にいったいどのような仏を祭っていたかを不明の場合、ブォの教示を仰ぐ。これについて、包月季⁶ブォは次のようなエピソードを語ってくれた。

クライアントに頼まれると私は心の中で祈祷して守護霊の教えを乞う。しかし、我々は、2つの世界（この世と霊界）に住んでいるので、守護霊にとっても難題のときもある。その場合、守護霊に「もし守護霊の教えがなければ、私は何も知らない。クライアントが私を信じて来てくれたのでぜひ教えてください」と必死に頼む。守護霊がベイリ（ブォのあの世）にいる他の守護霊たちと博捜して、答

⁵ 現在、ホルチン地方で、寺院では、無料で仏像や仏画、あるいは仏教関係の本を無料で配布されている。それは、寺院や仏教徒、あるいは、金持ちが功德を積むため、資金を出して購入してきて提供。

⁶ 本稿で、登場するブォとクライアントの名前を仮名にする。包月季ブォは、女性、1968年生、農民。

えを出してくれる。守護霊の託宣⁷をクライアントに伝えると、それを求めてきて祭りを復活させる。包月季ブォはクライアントに応えるため、守護霊という霊界の存在に頼っていることが明らかである。



図 2

包月季ブォ一家（2013年3月）。

夫婦⁸が共にブォで、民衆の味方として社会では評判が高い。

ブォの家は、見たところ普通の民家と変わったところがないが、中に入ると、普通の家と幾分異なった様相を示す。立派な祭壇をもったり、線香の匂いが鼻についたり、祭壇に銅製のオンゴット（神像）やチベット仏教の仏の像や画が安置されたり、祭壇にハダグ（ここで白い布の礼巾）が積み重ねられてあったりする。

仏教を信じる白い方向のブォは、チベット仏教の仏を祭るほか、銅製のオンゴット、銅鏡などを祭壇に安置して祭る。亡きホブル（1928－2007）・ブォの弟子の月明⁹は、2007年の時点で、義理の両親と同居しているため、祭壇を設けていなかった。それは、義理の両親が反対するのではないかと心配しているからである。シャマニズムが再活性化している中で、義理の親によって、最初はブォになることを反対するが、そのあと容認することもある。月明は分家して、核家族になると、祭壇を設けてきちんと祭祀するつもりである。現在、祭壇はないが、毎月旧暦の1、15日に守護霊に、線香を手向け、酒を捧げている。明月の守護霊に、母親の母方の、曾祖母の兄の死霊の他、赤の他人で、生前「正月」という名前のオドゲン（女性ブォ）の霊が憑いている。すなわち、明月の婚家と関係がない霊である。月明は、義理の親と一緒に住む拡大家族のため、義理の親に遠慮して祭壇を設置していないが、定期的な祭祀を守っている。すなわち、祭壇がなくても線香を3本焚いている。

このように、現在、事情があって、祭壇を設置していないが状況が変わると、設置するつもりでいるブォも存在する。ブォという道を歩んだ以上、守護霊の祭壇を設けて祭ることも欠かせない内容となっている。

包月季と白銀夫婦は、共にブォだが、妻は仏教を信仰しない黒い方向のブォで、夫の白銀は白い方

⁷ ここで、守護霊が後継者であるブォの頼みごとに対して、靈感で、感じさせることで託宣してくれる。

⁸ 包月季の夫白銀は、1967年生、10代から透視能力、予知・予言能力がすぐれ、人々に「小ゲゲン（小さな活仏）」と呼ばれた。現在は、骨の治療、子宝授けで評判が高い。

⁹ 明月、女性、1985年生、ホルチン左翼中旗TA村在住、農民。

向のブォである。そのため、白銀はチベット仏教の仏を祭り、妻は祭らない。家屋は、2009年5月に新築するまでは、土作りの2間屋だった。そのため、夫婦は、それぞれ祭壇を設けるには、難しいので、それぞれの守護霊に、将来別々に祭壇を設けてきちんと祭る、現在、祭壇が一緒になっていることを許してくれるよう乞うた。居間の西側の壁の中心の上段に白銀が20代のとき、知り合いが、中国仏教の名所、五台山から持ってきてくれた仏画を額に入れて掛け、その下に台を作って、供物を捧げているのは、夫白銀の仏の祭壇である。その下に机を仏教の寺院で見られるオレンジ色の布で被せて、その上にクライアントに献上されたハダグ（白い布の礼巾）を積み上げて載せている。両側に箱入り線香、造花があり、右側の手前に酒、香炉がある。ハダグは、クライアントが守護霊への感謝であり、褒美でもある。家屋の南東部の壁に白銀ブォのロスの祭壇がある。白銀は、旧暦の2、16日に仏に、8、18、28日にロスに線香を焚いて果物、チーズ、砂糖などの供物をささげる。妻の包月季は、旧暦の1、15日に守護霊に線香を焚く（図3を参照）。



図3

包月季、白銀夫婦の仏と守護霊の祭壇

上段の仏画の両側の赤い紙にモンゴル語で書かれた対聯を訳すと、左側、「仏教の恩恵で平和である」。右側、「仏教の守護で豊かになる」。上部、「仏教は太陽と月である」。

造花の隣に積み重ね

てあるのはクライアントにお礼として贈呈されたハダグである。



図4

白銀が居間の南東の壁に設置されたロスの祭壇。清水、果物、乳製品を供えている。壁に貼られている黄色の布にロスが憑依するとされる。赤い紙にモンゴル語で書かれた対聯を訳すと、左側、「ロスのお蔭で、出民衆は平安である」。右側、「ロスの霊力のお蔭で雨量のバランスが良い」。上部、「永遠のロスである」。豊作の祈願を窺える。

包月季は黒い方向のブォで、白銀は白い方向のブォにも関わらず、住宅事情によって、祭壇を1箇所を設置せざるを得なかったが、それぞれの守護霊に事情を説明した。日常生活において、共に一人前のブォである包月季と白銀夫婦は、守護霊に忠誠を尽くし、その霊力を評価し、守護霊の存在を強く意識している。包月季夫婦のそれぞれの守護霊も彼らの真意を心得ている。そのため、本来、黒と白方向のブォの祭壇が一緒になるはずのないことも可能となったのは、夫婦の守護霊に対する心構えの問題として2人は認識している。



図5 新築後の包月季と白銀夫婦の祭壇

土づくりの家の時、新築したら祭壇を別々にする考えだったが、新築後その祭壇の構造が基本的に変っていない。棚の上段に白銀の祭祀する仏画が安置され、その下の段は包月季ブォの守護霊の祭壇である。すべてを見抜く守護霊の象徴として鏡が安置され、その前にハダグと酒、果物を供えている。新築しても夫婦の祭壇が別々のところで設置されていないことについて、包月季は次のように語る。

わたしたち夫婦は、長年守護霊の力のおかげで多くの人を治療してきた。また、レンガ造りの家を建てたことも守護霊のおかげである。守護霊に日々感謝している。黒い方向のブォにしても、白い方向のブォにしても、基本は苦しんでいる人を助けるためである。この意味で、守護霊とブォの立場が同じである。祭壇を別々にするというのは形式的なことで、大事なのは心である。

ブォにとって、守護霊に対する信仰心と感謝の気持ち、民衆の苦しみを想う心の大切さをうかがわせる。

ブオたちは、巫病¹⁰と判明したときに、そのブオに祭るべき仏の名前を教えてもらって祭祀する人もいれば、弟子入りの段階で、守護霊の祭壇を設置して祭祀する人もいる。また、巫病者に憑いている守護霊たちがすべて口を開いた¹¹後、その要求などを把握し、ブオになる儀式を済ませた後に、師匠の指導の下、祭壇を設置することもある。現在、亡きブオの霊、ロスといわれる蛇の霊、胡仙や道封と言われる狐や鼬の精霊に憑依されるブオがいるため、ホルチン地方のブオの祭壇は基本的に、亡きブオの祭壇、ロスの祭壇、胡仙の祭壇と3種類に分類される。その上で、仏教の仏を祭る人も少なくはない。亡きブオの霊の祭壇と仏壇が同一箇所にあることもあれば、別々になっていることもある。また、基本的に黒い方向のブオは、仏を祭祀しないので、仏壇を持たないブオもいる。黒い方向のブオとなる前、既にチベット仏教の仏壇を設置してあった場合、そのまま引き続き祭祀する。弟子ブオが勝手に祭壇を設けて祭ると、悪霊が集まってくる可能性があり、また、守護霊とコミュニケーションが成り立たないと心配される。師匠ブオに祭壇に「入魂」してもらったほうが安全だと語るブオがいる。そのため、師匠ブオが弟子の要望に応じて、その家に赴き、守護霊である先代亡きブオの霊の祭壇、すなわち、オンゴット・イン・サルガに命をはいらせてやる。また、弟子ブオに憑いている狐、あるいはロスをそれぞれの祭壇に憑依させることがある。そのやり方は、きわめて象徴的な方法で、普通の人は目で確かめることができない。師匠ブオに祭壇に命を入らせてもらったなら、弟子ブオは、数百元から1000元の謝礼金を贈呈する。師匠ブオのこうしたサービスがもう1つの収入源となっている。

次に、具体的にブオの祭壇を紹介したいと思う。

2. オンゴット・イン・サルガ（亡きブオおよび銅製のオンゴットの祭壇）

ホルチン地方で、ブオが自分をブオにした亡きブオの霊をはじめ、銅製のオンゴットなど神具のために、家に常設している神棚（祭壇）をモンゴル語で、「オンゴット・イン・サルガ」と言われる。家に神棚を常設しているのが普通であるが、守護霊を招請するに当たって、必ずしも神棚が設置されている居間で儀式を執り行うとは限らない。神棚を設置する場所は、家の壁の一段高い所に台を設け、そこに崇拜する守護霊をよく祀る。また、人の手が届く家具に神棚が設置される場合もある。儀式のときに限って取り出し、祭壇に祭る神偶、神具があるため、儀式のときに改めて設けることが多い。場所としては西の居間の場合では、西側の壁のところ、東の居間の場合には、東の壁のところである。

世襲型ブオの場合、先代ブオの神具をオンゴット・イン・サルガ（守護霊の祭壇）に安置して祭祀

¹⁰ 未来の後継者として、守護霊に選ばれ、選びのメッセージとして、守護霊が後継者に与える様々な不調や不幸と夢である。

¹¹ 守護霊が巫病者に憑依して、生前、生後の経歴を打ち明かすことを言う。たとえば、生前の名前、干支、子供の名前、能力、死後の修行の場などである。

する。世襲型の場合、そのまま受け継ぐが、非世襲の場合、遺物がどこにあるかを教えてくれる守護霊がいて、それにしたがって求めてきて祭壇に安置するブォもいる。ブォによって、儀礼以外のときに、鞆や箱に入れて祭壇に安置する、祭壇の周辺に保管することがある。ホルチン地方で、黒い方向のブォにせよ、白い方向のブォにせよ、亡きブォの霊をはじめ、そのほかの守護霊、補助霊の力と神格は、仏に及ばないと一般的に考えられている。そのため、オンゴット・イン・サルガが仏壇と一緒にしている場合、仏像を祭壇の中心に、あるいは、より上方に設置されることが見られるが、絶対的ではない。亡きホブル・ブォも、仏の力がブォより強いと認識している。守護霊は、黒い方向のブォのため、本人は黒い方向のブォである。しかし、若いときに白い方向のブォに4年間弟子入りして修行した。そのため、仏画・仏像も祭っている。居間の西側の壁の上段の中心に台を作って、祭壇としている。祭壇の中心の壁にチンギス・ハーンの画を額に入れて固定してある。額から少し下がった両側の上下2段に弥勒と観音菩薩の画、バンチェン・エルデニ10世の写真、ホルチン地方の有名な活仏の写真が壁にかけられている。その前に数珠が注連縄のように掛け渡されている。段の中心に光背、香炉、杯があり、右側に剣、左側に御柳の鞭を立ててある。そのほかの銅鏡、銅製のオンゴットなどを包んで家具に入れて保管している。ホブル・ブォの祭壇を瞥見すると、チンギス・ハーンの絵がまず目に入り、ブォの道具の剣と御柳の鞭の上側に仏画がある。これを見ると、ブォが仏の下に位置するというホブル・ブォの理解が分かるが、チンギス・ハーンを仏画よりも上、しかも、中心に安置するというのは先祖と伝統を重んじ、シャマニズムをアイデンティティとして強調する意図が込められているのではないと思われる。



図6
ホブル・ブォ
の祭壇
3 間屋の一番
西の部屋、すな
わち、居間兼寝
室の西側の壁に
台を設けて設置
したものである。

ホブル・ブォの弟子オニソ・ブォ¹²の祭壇の内容がホブル・ブォに似る。オニソ・ブォは白い方向のブォで、その設置した祭壇は、西側の居室の西壁のところの箆箭の上にある。西壁に額に仏画を上下2段、合計11枚入れて掛けている。その下に左側に、中国の財神爺（富の神）、笑仏（財や家庭円満をもたらす仏）とチンギス・ハーンの画を壁に貼ってある。隣に、御柳の鞭が、少し離れたところに、3個の太鼓が壁にかけられている。その下、箆箭の上に、左からピンク色の造花、蓮の花を模った電燈、厨子に入れた浮き彫り掘れた青銅製の仏、陶製の白い観音菩薩、額に入れた、今は守護霊として守ってくれている亡き祖父の写真、額に入れた家畜の神・ジャチ夫婦の絵、鹿の角、木製の升に精米を盛り、銅製のオンゴットを10数体刺して、箆箭の上に安置している、隣に花瓶に入った造花がある。この1列の前に、3合の香炉、碗に白米が盛りつけられ、中に10数個の銅製のオンゴットを挿している。その隣に時に7星剣を立てることもある。この1列の前に、神灯、杯などが安置されている。祭壇と繋がっている南側の箆箭の上側の壁に、ホルチン左翼後旗チョロト町在住のクライアントから贈呈された「医徳高明、妙手回春」¹³、また、ジャロード旗ドロド・ソムのクライアントから贈られた「治病救人、功在千秋」¹⁴と漢字で書かれた旗を飾っている。居室の東側の壁に、ホルチン左翼後旗ガンジガ町のクライアントから贈呈された「医徳高明、妙手回春」と認められた1面の旗が飾られ、オニソ・ブォの治療能力を伝えている。旗はみな赤い布に黄文字である。治療を受けたクライアントが謝礼を厨子に入れておく人もいれば、箆箭の上に載せる人もいる。正月以外、ほぼ1年中住み込みで修行している弟子がおり、守護霊を招請する際には、線香を焚き、杯に注がれた酒を燃やす。オニソ・ブォには、祭壇に出して祭っている銅製のオンゴットの他、さらに30数体があり、箆箭に入れて保管している。そのほとんどが近年作られた、真鍮製の模造品であり、オニソ・ブォが名前をつけたものがあれば、ないものもある。オニソ・ブォの、実に多彩な祭壇からは、仏教、シャマニズム、道教の要素を読み取ることができる。



¹² オニソ、男性、1955年生、世襲型ブォ。

¹³ 医徳（仁術）は高明（抜群）にして、妙手（神技）もて回春（健康回復）せしむ。

¹⁴ 病を治して人を救い、功（名声）は千秋（とこしえ）に在（とどま）らん。

左図7 正装したホブル・ブォが祭壇の前にて、右図8 信者を集めるシラムレン寺院



図9 オニソ・ブォの仏と守護霊の祭壇。
 仏画。
 チンギス・ハーン
 の像。
 亡き祖父
 の写真。
 升に入れ
 た銅製のオ
 ンゴット。
 ジャチと
 ネネ・ボク

ダ。



図10
 ジャチと
 ネネ・ボグ
 ダ
 守護霊の
 名前である
 「ドラ」。
 升に入れ
 た銅製のオ
 ンゴット。
 チベット
 仏教の仏画。

オニソ・ブォの弟子ジャ¹⁵の祭壇は、師匠と類似性を示す。厨子に安置する赤い紙にモンゴル語で

¹⁵ ジャ、男性、1952年生、廃棄物回収業者。

「ドラ」と書かれてあるのは、ジヤの守護霊で、父方の伯父の名前である。厨子の隣に銅製のオンゴットを升に立たせてある。壁にかけているのは、家畜の神のジヤチと子どもの守護神のネーネ・ボグダの画像である。祭壇の右側はチベット仏教の仏の画像である。

近年、見られるようになった、亡きブォの名前を赤い紙に書いて祭ることは、漢民族の影響である。漢民族は、「常仙・長仙」（蛇の霊）、「胡仙」（狐の霊）、「黄仙」（鼬の霊）をそれぞれの名前を赤い紙一面に大書して祭る習慣がある。近年、ホルチン地方で、狐とロスに憑依されるブォが増えているため、守護霊の名前を書いて祭ることがみられるようになった。その影響を受けて、亡きブォの霊の名を認めて祭る風習も散見する。李満花¹⁶の祭壇にも師匠のオニソ・ブォと同じく、仏教、シャマニズム、道教、漢民族の文化の影響が見られる。祭壇の設置の特徴は、師匠のオニソ・ブォに類似している。師匠のオニソ・ブォに銅製のオンゴットを碗に精米を盛って、上から挿し込んで祭祀してもかまわないが、升に入れて祭るのが、しきたりに適っていると教えられたため、大工に頼んで特別に作ってもらったという。

ドルジ・レイチン（チベット仏教を信じるブォの一種）¹⁷のオンゴット・イン・サルガは、西側の居間のドアの上の壁を挟んで設置されている。銅製のオンゴット、銅鏡、御柳の鞭など神具を容器に入れ、包んでそこに安置している。旧暦の毎月2、16日に菓子、果物を捧げ、線香を焚いて祭祀する。西側の居間を南北2つに仕切り、西側は、仏の祭壇（ボルハン・ネ・サルガ）で、北側に、ロスの祭壇が設置されている。すなわち、ドルジ・レイチンの祭壇は、2部屋に3箇所ある。家屋の左側の部屋が3男夫婦の寝室である。息子の嫁の新花¹⁸が2006年9月に急に糖尿病となり、1ヶ月間の入院後も、体の痛みが消えなかった。ある日、家を訪ねてきた翡翠¹⁹ブォによって、ロスと婚家の父方の先祖の霊が憑いていることが判明したが、ドルジ・レイチンにブォの道に入ることを反対された。話によると、ドルジ・レイチンが先祖の霊が息子の嫁に憑依することに反対しているという。翡翠が師匠の包月季ブォに新花を弟子入りさせ、包月季ブォに寝室の西側の壁にロスを憑依させてもらった。机上に菓子、造花を捧げ、婚家の先祖の霊のため、祭壇を作らなかった。なぜなら、義父が守護霊の祭壇は、先祖の祭壇でもあるからであり、ロスの祭壇を別に作るのは、義父に憑いているロスと別ものだからである。守護霊を受け入れた後、新花は現在、痛みが緩和され、糖尿病も落ち着いているという。こうしてみると、ドルジ・レイチンの家に、祭壇は4箇所を設置されている。

ホルチン・ブォの守護霊は、亡きブォの霊、蛇、キツネなど動物の生霊・死霊のため、これらの守護霊にそれぞれ個性がある。また、ブォにも個性がある。守護霊の性格が温和、あるいは荒ぶるで、ブォも頑固な人がいれば、柔軟な性格を持つ人がいる。時にこれらの要素がブォの祭壇を左右する。

¹⁶ 李満花、女性、1973年生、自営の美容師。

¹⁷ ドルジ、男性、1936年生、世襲型ブォ。レイチンとは、チベット仏教を信じるブォの一種。

¹⁸ 新花、女性、1964年生、生業は、農業間牧畜業である。

¹⁹ 翡翠、女性、1966年生、農民、出稼ぎ者。



(左図 11) 筆者に手作りの太鼓を見せる李満花ブォ。



(右図 12) トランス中の翡翠シャマン。翡翠の守護霊は婚家の父方の祖父の兄の霊。

1人のブォに黒白両方の守護霊を憑依していると、状況が複雑化することがある。月亮²⁰ブォによると、生前黒い方向のブォであった祖父（主守護霊）に、仏を祭るよう1度も言われていないが、ホビルガン・ラマ（活仏、祖父の兄弟）から、観音菩薩と釈迦を祭るようお告げがあった。父方の祖父の霊は、月亮ブォの主守護霊で、病気治療、託宣の源泉である。生前、活仏だった祖父の兄弟は、自分を守護しており、様々なものを霊示してくれている。しかし、月亮ブォにとって、父方の祖父の霊は最も重要な存在である。月亮ブォ本人も自分のことを黒い方向のブォと認識しているため、活仏だった祖父の兄弟に仏を祭るように言われても、祖父の意思に従って、観音菩薩と釈迦を祭っていない。

婚家は昔から弥勒を祭祀してきたので、現在それを祭っている。しかし、仏に線香を定期的に手向けるのは夫である。月亮ブォはしない。守護霊を招き呼ぶ際に、祖父の霊が教えてくれたとおり、外へ出て1杯の酒を撒き散らして捧げるが、それ以外に、線香などは自ら手に執らず、住み込みの見習い弟子や家族が代わりに手向ける。ブォが自ら線香を焚かない事例はごくまれである。その理由を聞くと、「私は迷信（信仰）を信じない、命を救ってもらうためブォになった」と説明した。しかし、現在、ホルチン地方で力強いブォとして評判が高く、ブォ歴が20年となっているブォが自分のことを「信仰心がない」と主張することは、あまりに信じがたい。では、なぜ、このような発言をするか。その背景に主守護霊の意思への服従があると考えられる。祖父の霊に、招請する際、1杯の酒を外に出て捧げればよいと教示され、それを実行することは、本人にとって、線香を焚くことより重要視されている。弟子や家族が線香を焚くことは、積極的に評価している。また、その発言は、活仏だった

²⁰ 月亮、女性、1954年生、世襲型ブォ、農民、ホルチン地方で、名が知られた有名なシャマン。シャマンになって以来、シャマン業に専念しており、主人が農作業をしている。

祖父の兄弟の言うことに従わないことの言い訳になっている。



(左図 13) ドルジ・レイチン (2006 年 8 月撮影)



(右図 14) ドルジ・レイチンの寝室間居間のドアの上に設置されたオンゴット・イン・サルガ。中にレイチンだった父方の叔父が使っていた神具を入れて祭っている。

ジャロード旗在住の韓美芝²¹ブォによると、婚家の父方の 5、6 人の生前ブォだった先祖の霊が憑いており、黒い方向のブォもいれば、白い方向のブォもいる。時に、黒い方向の霊が体内に入ってくると、家屋に祭っている仏像を投げて壊してしまうという。韓美芝ブォの主守護霊は黒い方向のブォだった、義理の父親である。そのため、韓美芝ブォは、これまで仏教の仏の像や画を祭ったことがない。祭壇は、オンゴット・イン・サルガだけである。寝室で居間の北側に設置している。厨子に造花と電気で灯る御灯明を飾ってある。この厨子に守護霊、すなわち、義理の父親の霊がたまに黄色い光を放ちながら降臨して入るという。ところで、韓美芝ブォ本人は、ホルチン地方のブォの元祖とされるホブグタイ・ブォが、ボルハン・バッシ(仏)との勝負で負けた伝承を知り、仏の力を信じているが、生涯、仏教の仏を祭らなかつたのは、黒い方向の守護霊の性格に合わせたのである。現在、韓美芝ブォはオンゴット・イン・サルガの厨子の上に、額入りの観音菩薩の画像を安置し、上から白い絹のハダグを垂らしている。観音菩薩の画像は 5 年前に、同居している長女が娘を連れて五台山に巡礼したときに、買って来たという。家に他の祭壇がないので、そこに安置した。厨子と並べ、隣に安置してもよいだが、上に載せる理由を聞くと、韓美芝ブォは、「守護霊はいくら力があっても、仏に及ばないので、上段に安置することは理に適っている」と説明した。仏の功力を信じ、厨子の上に仏像を載せても、韓美芝ブォは、「私が祭っているのではなく、娘と孫が祭っている」と主張する。このよ

²¹ 韓美芝、女性、1929 年生、ウジエード部の出身だが、名字が「ハン」となっており「韓」は当て字である。

うに、信心は、祭祀に直結しない。もし、韓美芝ブォが、ブォの家に嫁入りしなかったら、1950年代までは、家に仏壇を設け、仏を祭っていたに違いない。しかし、結婚した後、黒い方向のブォだった、義父の霊に選ばれてブォとなり、守護霊の意思に従って、生涯、仏教の仏を自ら祭らなかった。信仰生活では、守護霊という存在に左右されたのである。韓美芝ブォによれば、毎朝3本の線香を守護霊の祭壇に捧げ、旧暦の毎月の2、16日の夜に祭壇に線香を焚き、外で酒を捧げることを怠ることがなく、必ず行う。もし捧げないと、病気になる。自分の守護霊にだけ捧げていることでなく、天神（テングリ）、土地と家の神々（ノトグ・オソン・ネ・ナブダグ・サブダグ）、土地の5つの悪霊などすべてに捧げる。ただ、自分の守護霊だけは、どうしても気持ちは不安である。悪霊に捧げるのは宥めるためという。



図 15

韓美芝ブォのオンゴット・イン・サルガ
(守護霊の祭壇)

通遼市に住むがん患者に呪薬を飲ませて完治させたお礼としてクライアントに贈呈された色鮮やかな房飾り。

長女が五台山から求めて来た観音菩薩の画像。

ハダグ

守護霊が降臨する厨子

3. ロスの祭壇

これまでの記述で、ロスの祭壇をいくつか言及したが、さらに具体的な事例を見てみよう。巫病者がロスと称される蛇の精霊に憑依された場合、判定したブォは、おおむね弥勒仏（メンチル）を祭るよう勧める。そのほかに観音菩薩、吉祥天女（ウヒン・テングリ・ボルハン）、老爺ボルハン（関帝）が推挙される。巫病者は、自分で、あるいは家族に頼んで寺院から求めてきて祭る場合がある。また、師匠に寺院まで案内してもらって求めてきて祭祀することがある。これは自分たちが求めてきたより効果が期待されているからだである。師匠に案内してもらった際、師匠の交通費、招待の費用、謝礼などを弟子ブォが支払う。

次にロスの祭壇の具体的な設置場所と祭祀状況を見てみよう。

【屋内の場合】

仏教に順応しなかった保守的な黒い方向のブォは、基本的に仏を祭らないので「オンゴット・イン・

サルガ」を設け、「ボルハン・ネ・サルガ」を持たない。また、黒い方向のブォにロスが憑いていると、「オンゴット・イン・サルガ」の下に「ロス・イン・サルガ」を設置する。ロスは、あくまでも動物の霊であるため、人間の霊を守護霊と補助霊とするブォの補佐役に過ぎないと考えているからである。仏教に順応した白い方向のブォの場合、「オンゴット・イン・サルガ」と「ロス・イン・サルガ」が同一箇所に設置されているのもあれば、別々になっているものもある。別々になっている場合、「ロス・イン・サルガ」が居間の北東部、南東部、北西部に設置されるのが最も多い。一般的に、居間の西側が神聖視され、ブォの守護霊・補助霊の祭壇、仏壇などがここに設置される。

「ロス・イン・サルガ」は、壁に段を作り、ハダグを敷き、その上に捧げものを供え、そこにロスを憑依させる。祭壇に憑依させても、シャマンが招請して体に憑依させる際、ロスが修行している山や海、湖から勧請する。また、龍の像がそこに祭られている事例もあるが、ないことも多く見られる。弟子が「ロス・イン・サルガ」を設置する際、師匠を家に招いて、ロスと弟子ブォを祭壇につないでくれるよう頼むことがある。師匠が自らそのように要求することもある。オニソ・ブォは、弟子のロスを招請して、トランスに入らせて、降臨したロスに、祭壇を設けてロスを祭るようになったことを告げる。弟子が意識を取り戻した後、「ロス・イン・サルガ」に向かって跪いて拝ませる。こうして、「ロス・イン・サルガ」は、弟子ブォの信仰の場となる。

【屋外の場合】

ロスという語は、蛇の精霊を指すほか、地霊、水の精霊をも指す。地霊・水の精霊が蛇の精霊と合わせて力を発揮すると言われることもある。ロスである地霊と水の精霊が走る脈があり、その周辺に住むとめでたいと言われる。そのため、ロスの祭壇を屋外で設置することがある。屋外に「ロス・イン・サルガ」を設置する場合、柳や榆、松、ポプラの上に木造の厨子を設置、ないしは印をつけて祀る。「モンゴル人の考えでは、榆の枝と葉が茂り、その佇まいに神威が感じられるため、榆にとこしえの幸福を祈った。柳の枝は瑞々しく、美しく枝垂れた葉があり、そこに繁殖力が潜んでいると賞賛する」[アラタンガルディ 1995:133-134]と民俗誌が描写するように、これらの樹が好まれている。



(左図 16) ドルジ・レイチンの屋外で設置されたロスを祭っている場所。すなわち、庭の北側に生えるポプラの樹のところに紐で印をつけているところである。

(右図 17) 左側から 1 番目は、ドルジ・レイチン 3 男の妻新花で、右側は筆者 (2011 年 8 月撮影)。

4. 狐の精霊の祭壇

これまでの調査で、ロスの祭壇を居室に設置して、祭っているのをしばしば見かけるが、狐の精霊の祭壇を居室に設置しているのは稀である。筆者は、ホルチン地方の漢民族の家で、居室に堂々と祭っているのを見たことがある。モンゴル人が居室に祭るのは少なく、狐の精霊という守護霊に、多少抵抗感をもっていることが伺える。倉庫、あるいは部屋を仕切って、祭壇だけにした部屋に祭っている。ロスと狐の精霊の祭壇を倉庫の片隅や家の一間に設置する。オニソ・ブオの自宅は、3 部屋で、東側の部屋を 2 つに仕切って、北側の部屋はロスと狐の精霊が同じ祭壇に祭られている。赤い紙の中心に黄色で「白龍」という漢字を書き、モンゴル語で右側に「万年の狐」、左側に「白いロス」と書いて左側の壁に張ってある。赤い紙の下に祭卓があり、赤い紙を造花で囲み、その両側に孔雀の羽毛を 1 本ずつ飾る。その両側に蓮の花と龍を模った電灯を、それぞれ 1 個ずつ、「龍」という字の手前に、後ろを赤布で包んだ弥勒の画を額に入れて置いている。左側に赤い造花を数本、花瓶に挿し、弥勒仏の前に置いた長方形の香炉から、線香の灰が溢れている。その前に、真鍮の杯が 2 口あり、左側に黄色の元宝を模った捧げものがある。その左側に供物を捧げるための黄色のプラスチック製の皿が 1 枚あり、中に 2 果の棗を供えている。その前に、バターに火を灯す杯がある。机の左側に、酒 1 瓶、および、バターを入れたガラスの容器が 2 個、机の右側に、予備の線香がある。旧暦の毎月 2、16 日に線香を手向け、酒を捧げる。通例、ロスを乳製品など白い食べ物で祭祀するが、オニソ・ブオは、酒は狐の好物のため、それに捧げているという。



図 18 オニソ・ブオの仏と守護霊の祭壇

翡翠ブォの家屋は、土の家で2部屋ある。倉庫は、西側の部屋が2つに仕切られて、北側の部屋は倉庫になっている。倉庫の南側の壁に狐の祭壇を設けてある。それは、師匠の包月季ブォの指示で作ったものである。壁に台を設けて、精霊を憑依させた赤布を額に入れて設置してあるが、狐の精霊の名前は書いていない。板で作った台にお菓子、線香、香炉、3杯の酒を置いてある。倉庫に入らないと、そこに狐の精霊の祭壇が設置されてあることは分からない。ホルチン左翼中旗在住の吉良²²によると、同じ村に住む師匠が吉良に憑いている狐の精霊、ロスの名前をそれぞれ赤い紙に書いてくれたので、各自祭壇に安置して祭祀している。現在8体の守護霊が憑いているが、最初に憑いたのは、自称「紅花仙女」なる狐の精霊であるため、最初に設置したのは、狐の精霊の祭壇である。後から義理の父方の祖父の霊が憑いたので、祭壇を別に設置することになった。なぜなら、人間の霊は、動物の霊より神格が高いと考えているからである。もともと狐の精霊のために作った祭壇の上方に別の棚を作って、先祖の霊の祭壇とした。このように、住居の条件によって、やむを得ず、一面の壁に守護霊の祭壇を設ける場合、人間の霊、狐の精霊、ロスの祭壇は別々に設置している。



図 19

包月季ブォの弟子翡翠の狐の精霊の祭壇

→ 赤い色の紙を額に入れて張り、そこに狐の精霊が憑依している。

5. ブォの祭壇の考察

1950年代以前、ホルチン地方の民間では、仏教の仏壇が一般的だった。ブォは、狐の精霊とロスに憑依されることは稀で、そのため、狐の精霊とロスの祭壇は今日のように多くなかったことが老ブォ、現地の長老の聞き取り調査で分かった。それまでは、ブォにとって「オンゴット・イン・サルガ」はブォのアイデンティティそのものだった。近年、増加している狐の精霊やロスに憑依されるブォは、それらの祭壇を設置する際に取りる行動と、「オンゴット・イン・サルガ」を設置するときのそれが異なる様相を示す。特に、狐の精霊の祭壇を人目につかない所に設置するのが主流となっている。これは、漢民族が狐の精霊の祭壇を公然と居室に祭祀していることとは、端的に異なる。狐の精霊は、漢民族の古代からの信仰対象で、漢民族の巫に憑依する主な守護霊の一種である。しかしながら、ホルチン地方のモンゴル人にとって、狐を禁じられる1980年代半ばまで、狐は狩猟の対象だった。モンゴル人は、狐や鼬を神として祭祀しないばかりか、忌み嫌う傾向がある。そのような狐や鼬の霊に憑依され、ブォとして活動して、その祭壇を設置するに際して、言葉に言い表せない葛藤が存在する。

²² 吉良、女性、1967年生、農民、生まれつき障害者。

モンゴル人は、狐の精霊に憑依される現象の増加に、漢民族の影響が認められるが、狐の祭壇をめぐる現象は、こうした異文化受容するプロセスで生じた葛藤の表れと思われる。ロスの祭壇は、仏壇と一緒にしている事例もあれば、別々になっているところもあり、居室や祭壇専用の室に設置される。仏教の影響を受け、ホルチン地方で、ラマは仏法を守護する存在として仏教と結びついてみとられ、また、ロスは、地霊、水霊など自然の精霊と結びつけて信じられているため、土着の信仰の中に位置付けて考えられている。そのため、ロスに憑依されるブォが、昔より圧倒的に多くなっても、狐の精霊と比較すると、民族の伝統文化の一環としてとらえられている。

祭壇の設置において、弟子が師匠の影響を受けることが窺える。

ブォの祭壇は、それは、守護霊とつながる信仰の場であり、ブォにとって精神的な便りの場でもあり、ブォの癒しの場であり、他人への癒しの場でもある。

参考文献

〈モンゴル語〉

アルタンガルディ他 1995 『モンゴルジンの宗教』(蒙古貞宗教)内モンゴル文化出版社
フレルシャ、白翠英他 1998 『ホルチンのシャマニズム研究』民族出版社

〈日本語〉

大道晴香 2010 「民間巫者の死後における『祭壇』の継承：青森県八戸市の事例から」

『東北文化研究室紀要』東北大学大学院文学研究科東北文化研究室 p. 126-107

サランゴワ 2011 「内モンゴル・ホルチン地方におけるシャマニズムの文化人類学的研究」

千葉大学社会文化科学研究科提出博士論文

(さらんごわ・千葉大学特別研究員、株式会社 カイクリエイツ)

The Altar of Buu (Shaman) in Holqin Area of Inner Mongolia

Sarangowa

Summary:

Among the public in Horqin area of Inner Mongolia, resuming the ritual of the Buddha of Buddhism, Jiyachi (the god of wealth) and Boomul as well as the livestock deified from generation to generation, in addition equipped with the Altar, it's being increasing to perform the daily rituals and periodical rituals. The altar of the buu shows more complexity than general people. The altar of the buu will be focused in this paper. The altar, also called "Sarga" or "Tahilgan Sire", is classified into more detail. Fundamentally, there are four kinds of Altar: ① the altar of the ritual for guardian spirit of buu is "onggud yin sarga"; ② the altar for ritual of Buddha in Tibet Buddhism is "borhan nae sarga"; ③ the altar for ritual of spirit of the snake called luus is "luus yin sarga"; and ④ the altar for ritual of spirit of the fox is "xian nae sarga", or "daofeng nea sarga" in Chinese. For the buus, the altar is also meant for the place for religious faith, the place for connecting with their guardian spirit, and the place for healing as well.